

# 想



# 随

## 多様性のすすめ

由 宇 晃 也

年を取ると、つまらぬ事が気になるようになる。

私は、バレーボールで、ポイントをあげるたびに、六人か九人かの選手が、ピョンピョンとコートを跳ね廻りながら、集まって抱き合うのが、どうも気に入らない。女性なら可愛い気もある。い

い年をした男性がやるのはどうだろう。

最近のスポーツには、コノテノ振舞いが多い。この間見たピンポンでは、ポイントを取った選手が、片手を高く挙げ、小さな円を描いて自陣のフロアを一周したのには驚いた。頭に紅白の飾りや乗せれば、藤崎さんの秋祭りである。目の前には、唇を噛みしめている相手もいるのに「見苦しサ」と思った。

古い奴とお思いだろうが、水師營で見えた乃木將軍とステッセル將軍を思い出すがよい。両者、胸中に複雑な思いを秘め乍ら、互いにその武勇と防備を賞め讃えた、というではないか。ステッセルの前で、乃木さんがピョンピョンをやり、大山巖や児玉源太郎と抱き合ったらどうなるか、私は、恥しさに卒倒するに違いない。

流石に、以前見たテニスのボルグとコナーズの試合では、そんな事はなかった。が、コナーズが、サーヴしたら、打ったりする時に「ゴハッ」という唸り声をあげるのはいただけない。弱い相撲取りが「グワッ、グワッ」と叫び乍ら立ち合うようなもので、常々、王者にふさわしくないと思っていた。果せるかなボルグに王座を奪われた。(ただ今度の全米オープンでは、マッケンローが制覇したが、これも、相手のゲルレイティ

スも、マナーはダメである) 思い出したが、高校野球でも、打席に入ってから、相手投手に向かってホエル選手が多くなった。ホエタからといって強そうにも見えぬのだが。プロ野球にはそんな選手はいない。しかしプロ野球も、選手がホームランを打つたびに全員がダグアウトの前に並び、ホームインした選手とセツセツセをする習慣がある。ハナにつく。江川問題以後、一層ハナにつく。

だから、今後こんな事は一切止めろ、とは言わぬ。スポーツに限れば、チームワークもあり、まあよからう。だが、一人ぐらい、ソッポを向いて、ズリ落ちたズボンを引き上げり上げる選手がいてもよいではないか。

最近、日本人は国際的になったと聞く。が、依然として、働きバチとかウサギがどのと言われる。資源小国ゆえという事もあるが、真面目にして禁欲的な国民であるからだと思う。だから、何かと言うと「一億総蹶起」的発想に陥りやすい。これは危険だ。

これからの日本には、ある者はピョンピョンをやり、ある人はズボンをすり上げるという多様性をそ望ましいと思う。(熊本放送)

一生は半ば運命付けられているのかも知れない。

主人や私たちの青春は、戦争と言う世界的な渦の中で国家意識に燃えていた。あたりを見廻しただけでも数多くの知人が若い命を散らしていった。

息子たちはとにかく平和の時代に生れて育ったのだ。幸せな巡り合わせと言っべきであろう。そしてそのエネルギーは今を生きること燃やされている。それもいだろう。

人生が時間だとすれば、一瞬一瞬を精一杯生きたこと取りも直さず人生を精一杯生きたこと言える。今頃は、颯風一過、急に涼しくなった。今頃はそれぞれの下宿で何をしているのだろう。夫婦ふたりだけの秋の夜が更けてゆく。(知性と感性同人)

## 表札のこと

永 田 幸 男

私の家の門柱には八永田Vとだけ書かれた真新しい表札が掛けられている。訪れる大抵の人がすぐそれに気付いて、怪訝な面持ちで質問するのが、数年來のしきたりになっている。次から次と

## 夜ふかし

上 田 千 鶴 子

先ず二男が埼玉に、次いで長男が福岡に、夏は馳け足で去ってゆく。

「おやじさん、明日から淋しくなるだろう」と言う息子の言葉に「何を言うか、早く帰って勉強しろよ」と強がりを言っていた主人も「只今無事到着」の電話が掛かってくるのを心待ちにしているのだ。

この一ヶ月、息子は文字通り夏休みだった。

折角帰って帰った教科書も遂に開かずじまい、旧友たちと遊びに出かけては帰りはいつも深夜である。珍しく家に居てステレオを聞いているかと思えば、十二時近くになって「おやじさん、何か食べにゆかないか」と誘い出しにくる。かくて親子四人、深夜の町に車を走らせるのだ。

官吏の家に生れ、早起き早寝を当然の事と思っていた私は、結婚して主人の夜ふかきに先ず驚いた。主人の祖父の家は旅館であった。

主人はそこで育ったのである。

その結果、毎年せつせと新しい表札が掛けられる結果になるのである。

昭和四十八年十一月、大洋火災は一瞬のうちに、百三名の尊い人命を奪ってしまった。

ほんの数分前まで、一諸に売場に立っていた同僚、部下が無残な黒くげとなつて運び出されたあと、私はまだぶすぶすとくすぶる焼け跡に立って、亡くなったこの人たちの為に、自分の余生を捧げようと、誓ったのであった。

二年の後、店は再開されたものの、火災のイメージによる後遺症は、意外に根深く、不況の波をものにかぶって、やがて倒産を迎えるに至る。私はこの間、誰かが必ずやらねばならぬ遺族補償の作業と、火災患者の通院のお世話を率先買っていた。かたわら生き残った者のせめてもの償いの思いに馳られ、せつせと献血運動に力を注いだのである。

向日美が朝のしづくに濡れて、大輪の笑顔をふりまくある日、献血回数四十回を記念して赤十字社から贈られた白陶の表札を、うやうやしく門柱に掛けて一年が過ぎた。今年の受験生たちは表札を失敬する伝統的(?)な習慣を知らないのか表札は無事である。

私には、そのことが何故かしきりに淋しく、反面叩つとした心地でもある。

(詩人)